

CONTENTS

- シリーズ この人に聞く 第17回
2-3 玉本英子さん
「尊厳を奪われた女性たちの苦悩」
- ユニセフセミナー 2019 in 大阪
4 「SDGsと日本の子どもたち」
- 活動紹介
5 出前授業で使える！
資料・データハンドブック
- 6 活動フォトニュース
- 7 活動日誌（5月～7月）



いま生きて
いる幸せ

尊厳を奪われた女性たちの苦悩

—— ヤズディ教徒迫害の実態



ジャーナリスト
アジアプレス大阪オフィス所属

たまもと えいこ
玉本 英子さん

戦争や紛争地など戦火のなかの市民を視点に取材活動。イラク、シリア、レバノン、コソボ、トルコ、アフガニスタン、ミャンマーなどを写真、ビデオで取材し、発表している。99年タリバンに公開処刑されたアフガニスタン女性を追ったドキュメンタリー映画「ザルミーナ」を監督。共著多数。第54回ギャラクシー賞・報道活動部門・優秀賞を受賞。

イラクを中心に、シリア、トルコなどにまたがる地域に暮らす少数派のヤズディ教徒。イラクでは人口60万人ほど。残虐な暴力行為で恐れられた過激派組織「イスラム国(IS)」はヤズディ教徒の崇拜する孔雀天使(タウス・マレク)の存在を「悪魔崇拜」と決めつけ、迫害した。2016年、国連はヤズディ教徒への大規模なジェノサイドが行われたと報告した。その迫害の実態とはどのようなものか、長年ヤズディ教徒を取材してきた玉本英子さんに聞いた。

ISの襲来

2014年8月のことでした。イラク北西部の町シンジャルにいるヤズディ教の友人から突然電話が入りました。「助けてください。武装した集団が自分たちの村に入ってきて、村人を殺している。女の子たちを捕まえている。」ISの襲来です。

目撃者によると、ISは村を包囲し、逃げられなかった村人を男と女に分け、男たちにはイスラム教への改宗を迫ったと言います。しかし、ヤズディ教徒にとって信仰は親から受け継いできたものであり、急に改宗しろと言われてもできるはずはなく、拒絶するとISは男性たちを銃殺したのです。

女性や子どもは、ISにとって人間ではなく「戦利品」でした。女性たちはミニバスに乗せられて、ISの支配地域であるモスルやシリアのラッカに運ばれ、結婚式場のようなホールに押し込まれました。そこで「奴隷」として、ISの男たちに買われていったのです。イスラム教では4人まで妻を持つことができるので強制結婚させ、気に入らないことがあれば躡(しつげ)と称して暴行する。多くの女性たちが性暴力だけでなく、殴る蹴るの暴力を受けました。こうしたことがIS戦闘員のなかで大々的に、組織立って行われたのです。奴隷の扱いに関する手引書のようなパンフレットも作られていました。少年らは軍事訓練所に送られ、戦闘員となるために洗脳された子もいます。

癒えない傷

ヤズディ教徒のコジョ村出身のナスリーンさんが、ISに拉致されたときの過酷な体験を語ってくれました。レイプされる恐怖、そして生きて戻ったとしても、婚前婚外交渉に厳しいコミュニティに受け入れてもらえないだろう不安、「私は家族の元へ帰ったときのことを考えていました。もう両親にとって娘ではないだろうと」。

同じくヤズディ教徒の19歳の女性は、「私は一日に何度も死ん

だ」と言いました。ドイツに渡った女性は幼い子どもを抱えながらメンタルケアを受けていますが、眠れないなど不安を抱えています。ある日、ドイツの路面電車に乗っていたとき、長いひげをのびし、黒いTシャツを着た男が乗り込んできた瞬間にISを思い出し、泣き叫び、電車の中が大騒ぎになったそうです。

けがをすれば血が出て、止まれば治ったとわかる。しかしメンタルな部分というのは治ったのかどうか、よくわからない。母親である彼女は子どもの世話を優先しなければならず、目に見えない治療に多くの時間を割くことができないのだと言います。

成長に影を落とす

ISに拉致され、戦闘員訓練所から戻った子どもに聞いた話です。訓練所ではコーランを学び、勇敢に闘って死んだら天国に行けるというジハード(聖戦)について何度も聞かされたそうです。ISの宣伝映像を繰り返し見せられ、人の首を切るときはこうするんだと教えられた子もいました。ヤズディ教徒の十代前半の男の子は洗脳され、大量の爆薬を積んだ車に乗って自爆し、2人も亡くなりました。

4歳で拉致され8歳で戻ってきた少年は、親の顔を忘れていたと言います。ほかにも母語のクルド語が話せないで、家族と会話ができず、なじめない、兄弟げんかでナイフを振り回すといった異常行動に、女の子とは違う傷の深さが現われています。

—— ISの戦闘員だった子どもたちは、今どのような生活をしているのですか。

多くはドイツなど国外に移住しています。数年前にドイツ政府は、ISに拉致され逃げてきたヤズディ教の女性や子どもなど約2,000人を庇護し、2年にわたる精神ケアをするプロジェクトを行いました。

——被害に遭った女性たちは、なぜ、あえて辛い体験を語るのですか？

解放されて2週間後に取材した女性の胸は傷だらけでした。こういう形で暴力を受けていたと見て欲しいと。ノーベル平和賞を受賞したナディア・ムラドさんもISによる性奴隷被害の実態を世界に伝えるために、さまざまな国際会議やメディアに向けて体験を語りました。自分の過酷な体験がなかったことになるのは耐えられない、ISが何をしたのか、ヤズディ教徒たちの苦しみを知ってほしいという思いが、彼女たちを突き動かしています。

——ISの非道な行為は、人類が築いてきた普遍的価値観を全否定するようなものです。

人間というのは何かのきっかけで紛争や戦争に入り込むと、残酷で普通の人からするとあり得ないことでも平気でやってしまう恐ろしさがあります。また、子どもは戦争の犠牲者というけど、加害者にもなることを私は取材で何度も見てきました。

——われわれは何を、どうしていきべきなのでしょう。

テレビや新聞を読んで、自分が感じるものがあれば拡散したり、メディアに手紙やメールを書いてほしい。今の時代、皆さん批判は好き、でも褒めることはあまりしない。視聴者が記事や番組を褒めて視聴率が上がれば、伝えるほうはまたやろうかということになります。

あとは寄付です。シリアは今内戦状態ですから、ユニセフは政府が管理していない地域にスタッフを置いて直接支援することが難しい場合もあるのですが、実は現地のNGOなどを通じていろんな活動を行っています。寄付することが、最終的に被災した

り難民となった彼らの生活のプラスになっています。

そうした行動を起こすためにも、まず事実を知らないといけません。今日参加してくださったように、こうした講演会や報道にもっと関心をもってもらえれば、必ず次につながってゆくと思います。

(本稿は5月24日に行われた講演会をもとに加筆し、構成しました。)
(文・近藤敦子)

ヤズディ教

クルド人の少数が信仰する宗教。ゾロアスター教やミトラ教など古代宗教の影響を受け、イスラム教とはまったく異なる。ヤズディ教徒から生まれた者しかなることはできない。信仰は基本的には親から子へ、口承によって教えが伝えられてきた。

ヤズディ教徒は100年以上前から、一部のイスラム教徒の過激な思想をもつ人から攻撃の対象となっていた。フセイン政権時代には移住政策によって畑のある地域から土漠地帯に追いやられ、弾圧された。



村にISが襲撃。夫は殺害され、女性はISに拉致。地元のイスラム教徒住民の助けで脱出した。現在ドイツで暮らすがトラウマに苦しむ。2016年撮影：玉本英子